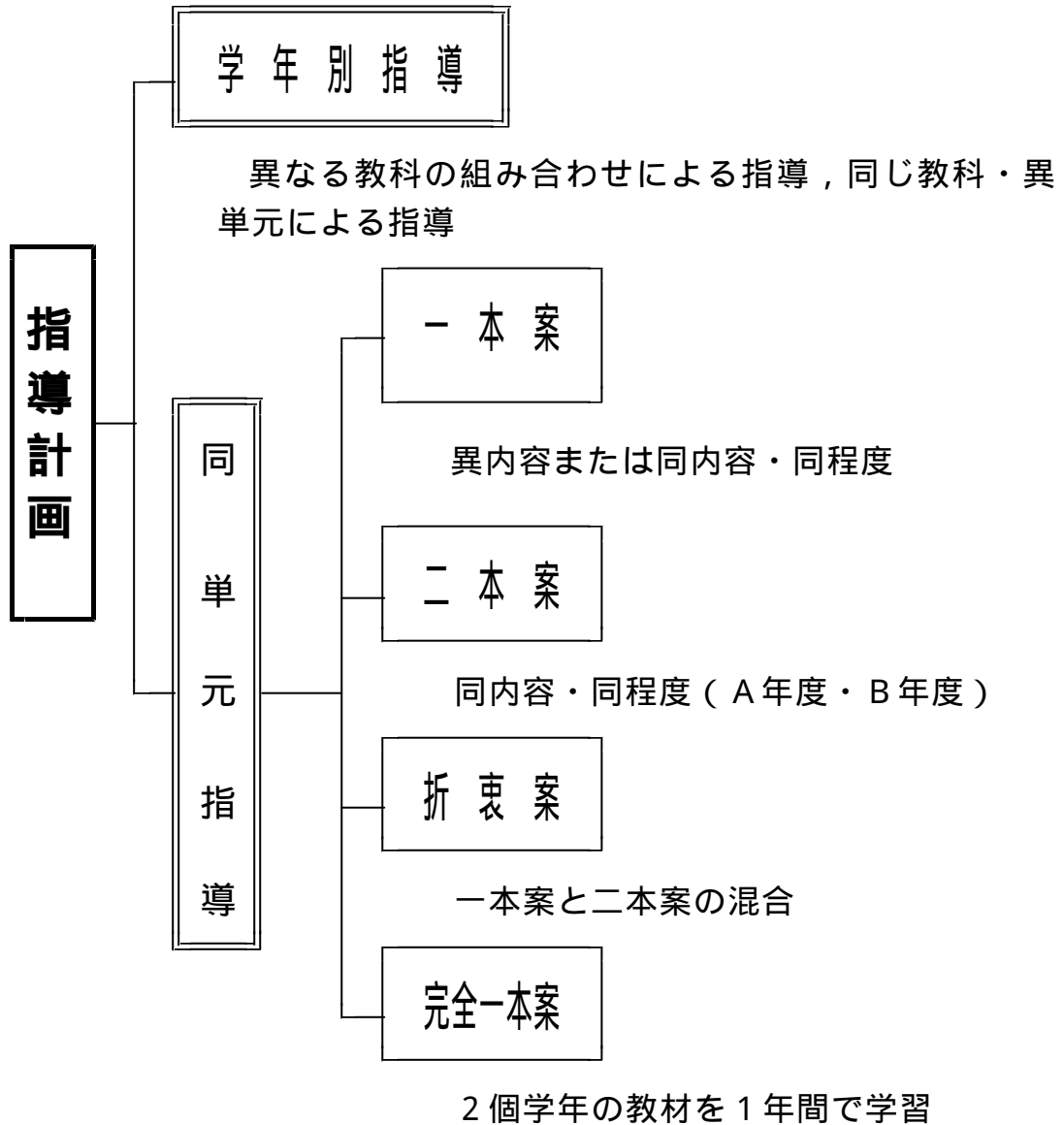


## 複式学習の指導計画

複式の指導計画は次のように類型化される。各教科の特性と学校の実態に応じて指導計画を作成することが大切である。



それぞれの指導計画の特徴と配慮事項をまとめると下表のようになる。

類 別	特 徴	指 導 上 の 配 慮 事 項	
学年別指導	<p>学級編制の組合せに左右されない。            発達段階に応じた指導が可能である。            教科の系統性を踏まえた指導が可能である。            比較的指導計画が立てやすい。            教科書使用が便利である。</p>	<p>学習指導が断片的にならないようにする。            導入、終末段階に十分な時間を取る。            間接時の学習のさせ方に配慮する。            他の学年の学習に気を配り、学習に集中させることに留意する。            実験、観察等の指導に配慮する。            教材研究等、事前の準備を十分に行う。</p>	
同単元指導	<p>計画作成は、教材研究、資料の準備等をまとめた観点から行うことができる。            個人差、能力差に応じた指導に着目し、個別指導の徹底を図ることができる。            直接指導の機会が多くなり、学習の個別化や集団化を図ることができる。            協力学習等を進めることによって、好ましい人間関係を育成することができる。            学級全体が同じ雰囲気での学習できる。</p>	<p>低学年（特に入学当初）の指導には気を付ける。（話し合いへの参加など）            欠学年、転入・転出者があつたり、予想されたりする場合の対応に留意する。            教科書の配布と活用の仕方を考慮する。            指導計画の作成には、細やかな配慮が必要である。</p>	
同単元指導	一 本 案	<p>児童生徒の学習経験や生活経験の差に応じた指導を、計画的に進めることができる。上学年の子どもが、下学年と学習できるので学習の定着を図ることができる。            変則複式の学校では、学級編制の変動に対処することができる。            教材研究を系統的、発展的に行うことができる。            個に応じた指導を計画的に行うことができる。</p>	<p>異程度の指導をするが、できる限り共通指導の場面を考える。            両学年の学習目標に差があるので、下学年に指導が偏ったり、上学年の発展的な指導がおろそかになったり、人数の多い学年に指導が偏ったりすることがないように配慮する。            同一教材を2学年にわたって指導するので、教材の精選が必要である。</p>
	二 本 案	<p>学習内容については、単式学級と同じ指導ができる。つまり、間接指導の必要がなくなり、一人一人の能力に応じた指導をする時間を生み出すことができる。            実験・観察・調査等の学習活動を十分に行うことができる。            指導の個別化、集中化が図りやすい。            協力的な学習態度の育成ができる。</p>	<p>系統的、累積的な内容の指導、特に技能的な面の指導に留意し、指導の徹底を図る。            転出・転入がある場合は、当該学年の学習内容の指導がおろそかになりやすいので、取り扱いに十分留意する。            教科書の配布と活用の仕方を考慮する。</p>
	折 衷 案	<p>基礎的、基本的な内容の定着を図ることができる。            下学年の児童にとっては、一部基礎的な内容を繰り返すことによって、学習内容を確実に習得することができる。            総合的に学習することが可能である。</p>	<p>上学年には、同じ教材の繰り返しになるので、興味・関心・意欲の高まりと持続に配慮する。            指導計画の作成に留意する。            教科書の配布と使用の仕方を考慮する。</p>
	完 全 一 本 案	<p>個人指導や個別指導に重点を置いた指導に有効である。            教材の精選が図られ、指導計画が立てやすい。</p>	<p>2年分の内容を1年間に圧縮して指導するため、十分な理解を得るまでの時間の確保を考える。            上学年の指導内容を主にした計画になるため、下学年の指導に配慮する。</p>